

新真打「瀧川鯉橋」 師匠誕生

副会長 勝島 敏明（直江津出身）

平成二十四年五月、落語芸術協会（会長 桂歌丸師匠）から五人の真打が誕生した。その一人がわが故郷出身の落語家「瀧川 鯉橋」（本名 高原 隆）である。

新作落語を演じる若い落語家が多い中で、彼は古典落語を演じている。最近富みに落語が上手になってきたなあと、思っていたら、真打である。嬉しい限りである。

瀧川 鯉橋は直江津出身である。

平成元年に直江津高校を卒業している。その後、日大に進んだとのことだが、卒業はしていないようだ。親父さんは「米来軒」というラーメン屋をやっていた。その長男である。

お父さんは高校時代野球をやっていたとのこと。スポーツマンだったようだ。そのお父さんの友人の佐藤敏（さとうさとし）さんのお世話で鯉橋はこの業界に入ったようである。佐藤さんは我々にとって是有名人である佐藤策次さんのお子さんで、若いころ「小さん

師匠に弟子入りしたこともある粋人で、今は藤間流の名取であり、上越市会議員でもある。

十四年前の平成十年に「春風亭昇昇（後 瀧川鯉昇）の門をたたき、前座は「鯉奴」（こいぬ） 四年後に二つ目となり「瀧川 鯉橋」と改め、今回入門から十四年目にして真打に昇進したわけである。アルコールは至って好きで強く、煙草もやるし、賭けこともやるのではないかと想像しているが、性格は明るく、真面目で好感の持てる好青年（いや中年？）である。

一年半ほど前に突如結婚して、周りを驚かせたが、その奥さんが、なんと「永六輔」の姪御さんであった。その姪御さんが「鯉橋」のファンでよく寄席に来て前の方で聞いていたのだそう。そんなことから仲良くなって、結婚ということになったとのこと。真打ち昇進披露パーティーで永六輔さんが「私が大事にしていた姪御を奪ったやつがいた。それが鯉橋であった。」といった趣旨の

お祝いの言葉を述べられていた。そういえば最近「ラジオの番組の「永六輔その新世界」に「鯉橋」が何度か出演していたので、お聞きになった人もいらつしやるであろう。

いずれにしてもこれから益々芸に磨きがかかり、大落語家になっていくものと期待している。直江津高校同窓会としても、その活躍を大いに期待し、応援して行くつもりである。会員の皆

様も是非応援していただきたいと思っ
ている。上越ネットワークからは「楽屋のれん」をお祝いとして贈ったが、直江津高校同窓会関東支部役員有志が「紋付羽織袴」を贈った。真打ち昇進披露公演ではその羽織袴を着て高座に上がった。

なお、毎日新聞の五月二十八日の夕刊に掲載された記事は、面白いし参考になるので、転載させていただきます、永

落語芸術協会披露
真打ち昇進披露
(7日、未だ亭・上席夜の部)



瀧川鯉橋—横井洋司撮影

寄席

喜びに満ちた鯉橋のトリ

席で、5人がまとめての春風亭昇太、後見役

昇進するのだから、トを務める昇進者の師匠

橋協会から5人の新真打は順番でト回す。である瀧川鯉昇、昔

打ちが誕生した。番鯉橋のトリの番を見亭桃太郎居並ぶとい

順に昔昔亭健太郎改めた。この日はトリの前う形。寄席の知恵

春風亭愛橋、柳太改めに芝菜が「箱問答」と言えるよう。

春風亭柳城、昔昔亭笑愛橋が「動物園」を披

海改め柳亭芝菜、瀧川 露した。

披露興行は新宿・末打ちのとき、こうして

丁寧に演じて笑いを膨らませていったからで

した。10日替わりの定口上もこの3人に司会

ある。

コンニャク屋のわ

か坊主に諸国行脚の備

が神問答を挑む。備が

両手の親指と人差し指

で輪を作り胸中を問う

と、お前の店のコンニ

ャクはこのくらいだろ

うと勘違いしたにわか

坊主は両手で大きな円

を描いて「このくらい

だあ」と無言の問答。

ジェスターのよう

に動きの多い一席で、

備が負けてしまおうか

しさがにじみ出た。鯉

橋、とほけたおかしさを

を裏面目に演じた切った

き出すのつまが、

た。入門から14年、

初めて主任（トリ）責

任興行を務められる

喜びに満ちた高座だっ

御祝い

永六輔、落語界にうといわけではない。

生家の寺の門を出て、左の突き当りは寄席の「鈴木」、右へ行けば「浅草演芸ホール」、途中の白鷺高校は、生徒全員に三味線が用意されている。近所の銭湯の昼下がり、売れない芸人さん達が噂話をしている。そんな町で育った、永六輔、落語界にうといわけではない。

寄席好きの父に連れられて、時には須田町や、人形町に出かけ、可楽や三木助に間に合った。岡本文弥の一言、「戦争はいやでございませう、あれは散らかしますから。」は忘れられない。談志の小五郎、小三治のさん治もおぼえている。

好江姐さんに頼まれて、柳昇師匠から「アタシを師匠にさして下さい。」と云われ、その後弟子入り。昇太を「あにさん」と呼ぶ破目にもなった。

だから落語にうといわけではない。父が憧れていた「席亭」を実現して、親考行も出来た。沢山の前座が真打に育っていった。だから落語にうといわけではない。

その永六輔が「瀧川鯉橋」を知らなかった。この頃落語に興味を持ち始めた煙がいたので聞いた。「鯉橋師とは、昨日よりもおとつい。明日よりはあさつて」という時間枠に居そうな人。レコードというならB面の気配を持つひと。今度紹介します「僕が実家へ帰った時、その男は住職のように出迎えた。たしかにB面の風情だった。」

一方、永六輔は転倒が続いてパーキンソン病。早くリハビリから卒業して、パーティにも参加したい。リハビリ仲間の野坂昭如サンから云われたことがある。「時代が怪しい。これからは、米どころに親戚があることが大切だ。」

鯉橋に出身を聞くと「越後・直江津」なんという目出たい結論。やれ目出たい。メデタイ。永六輔、落語界にうとい。

平成二十四年 三月吉日

永六輔



「ネットより贈った楽屋暖簾の染色『謙信褐紅紫』について解説する理事の藤田香代さん